

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2008～2009

課題番号：20820033

研究課題名(和文)

格体系と副詞的構文に見られる R a r a と文法の限界

研究課題名(英文)

Rara in case systems and adverbial constructions and limits of grammar

研究代表者

野瀬 昌彦 (NOSE MASAHIKO)

麗澤大学・外国語学部・助教

研究者番号：20508973

研究成果の概要(和文): 比較・類似構文の対照研究を通し, 格, 前置詞・後置詞, 及びその他の要素に関わる文法特徴のタイプ分けをした。加えて, 印欧語, フィン=ウゴル語, パプアニューギニア・オーストラリアの言語の文法を観察・対照し, 格の用法に関する Rara (珍しい特徴) をいくつか明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文): This study has classified comparative and similitive constructions in several types, according to usages of cases, prepositions, postpositions and others. This study has clarified rara of case usages by observing those of Indo-European, Finno-Ugric, Papua New Guinea and Australian languages.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,240,000	372,000	1,612,000
2009年度	1,120,000	336,000	1,456,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,360,000	708,000	3,068,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：人文学・言語学・言語学

キーワード：格, 副詞的構文, 比較構文, 対照研究, 珍しい特徴

## 1. 研究開始当初の背景

(1) フィン=ウゴル語は格を多く持つ言語であり, その格体系は主格や対格などの文法関係を表す文法格, 「-の上で」や「-の中で」等の場所関係を表す場所格, そして「-と共に」「-として」のように副詞的意味を持つ副詞格の三種類に分類することができる。特に文法格以外の場所格と副詞格の用法に注目し, その用法を理論的にまとめるための方策を模索していた。

(2) 比較構文(太郎は二郎よりも背が高い)や類似構文(太郎はウサギのように速く走る)は, 副詞的な要素が関与する点から, 「副詞的構文」と呼ばれることがある。例えば, 比較構文には, 日本語の「二郎より背が高い」の「より」のように場所的な意味から成立するタイプの他に, 英語の than のようなパーティクルを使用するタイプ, ニューギニアや南米に観察される「太郎は背が高い, そして

次郎はそうではない」という並列するタイプ、そしてアフリカ等で見られる「優る」(exceed) という意味の動詞を使用する優劣の関係が述べるタイプの4種類がある。特に、フィン＝ウゴル語の比較構文、類似構文では、格やパーティクルがこの副詞構文に用いられ、その用法を特徴づけることに問題があった。

## 2. 研究の目的

(1) 格が多いとされる言語（日本語やフィン＝ウゴル語）では、場所格ばかりではなく、副詞的な意味を担う副詞格（-のように、-として、-よりも）が存在する。本研究では、そのような副詞格に関して世界の言語を調査し、珍しい機能を持つ格の探索と、格がどこまでの意味を持つのかという限界を調査しようとした。

(2) 副詞格に関連して、比較構文と類似構文に関して、世界の言語でどのような形式が可能かを調査した。特に、格体系が豊富な言語と、逆に格を一切持たない言語の文法を吟味し、その違いや特徴を見出そうとした。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、世界の言語を80から100語サンプルとして抽出し、それらの言語の文法を調査する。文法内に現れる場所格、副詞格、比較構文などの文法特徴のデータベースを作成する。そこから珍しい特徴 Rara を見つけ、そのような Rara が存在する理由を機能的、認知的説明を加える。

(2) 実際の調査は、記述文法の記述を丹念に収集し、できるだけ多くの言語の文法をデータに打ち込む方法と、一部の言語に絞ってパラレルテキストを対照することで、言語間の文法的な相違を観察する方法を実施した。

(3) 収集したデータから、共通の特徴や違いをまとめ、その中から珍しい特徴(Rara)を見出すことを試みた。特にパプアニューギニアの言語の文法的多様性に関する詳細な分析を通して、Rara を言語理論や言語普遍性の点から位置づける。観察された Rara を世界地図や意味地図を通して、視覚的に捉える方法論を考え、実践した。

## 4. 研究成果

(1) 2008年度は格および副詞的構文に関して、記述文法を使用した言語類型論的研究と翻訳テキストを使用したパラレルテキスト分析の両方に着手した。特に印欧語（英語とドイツ語）、フィン＝ウゴル語（ハンガリー語とフィンランド語、エストニア語など）に加え、アジア、アフリカ、太平洋地域のデータを収集した。それに伴い、記述文法書を数多

く入手し、文法記述データベースの枠組みを構築した。特に、格を持たない言語において、場所格や副詞格が持つとされる機能がどのように実現されるかを調査し、前置詞や後置詞が使用されるほかに、語順や動詞に含まれるような用法を見出し、単に機能を言語で対照することの困難さという問題が発生した。

加えて、国全体で800言語もの現地語とクレオール言語であるトクピシンが話されるパプアニューギニアにおいて、フィールド調査を実施し、生の言語データを入手した。特にパプアニューギニアで公用語として話されるトクピシンに注目した。まず、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ヴァヌアツで話されているメラネシアクレオールの状況について過去の調査と文献を参照しつつ、その社会言語学的意義を論文化した。さらに、トクピシンで書かれた新約聖書を入手し、聖書を使用したパラレルテキストを使用の副詞的構文の対照研究に従事した。トクピシン、日本語と英語の新約聖書の比較構文と類似構文を対照し、トクピシンの特徴を明らかにした。その結果、英語ベースのクレオールであるトクピシンは、比較構文と類似構文では英語とは異なる形式で構文を形成していることが判明した。

次に、パウロ＝コエリョの著作「アルケミスト」のパラレルテキスト研究を日本語、英語、ドイツ語、ハンガリー語、フィンランド語5言語で実施した。このパラレルテキスト研究では、特に類似構文を対照し、その結果、格が多いとされるハンガリー語やフィンランド語においても類似構文で、従来使用されると考えられてきた様格(essive case)や変格(translative case)が使用される例がそれほど多くないことが判明した。英語やドイツ語においても、パラレルテキストを使用した対照では、上手く対応する文法形式（英語だと”like”，ドイツ語だと”wie”）が必ずしも出現しないことが判明した。

2008年度の成果としては、比較構文や類似構文に Rara を見つけることはできなかったが、クレオール言語の文法に着目することで、文法の多様性や限界をある程度明らかにすることができた。

(2) 2009年度は本研究の総括として、研究成果を国際学会で発表し、論文を執筆することを中心に作業を進めた。

まず、副詞的構文に関して、翻訳テキストを使用したパラレルテキスト分析を引き続き実施した。「アルケミスト」に加えて、村上春樹の「世界の終りとハードボイルドワンダーランド」の各国語版を使用した。日本語、英語、ハンガリー語、フィンランド語とドイツ語で対照し、その結果を社会言語科学会や語用論学会で発表したが、同時に対照研究に

おける問題点や限界も指摘された。パラレルテキストを使用した研究の結果、格を多く持つ言語が格を使用して表現される際、格を持たない言語や格の数が少ない言語では、異なる文法形式で表現されることが判明した。これは、特定の機能を表す形式の組み合わせがいろいろな可能性を持つことであり、この点から文法の限界について明らかにできることを論じた。

また、場所格と副詞格については、記述文法を基盤とした調査を行い、パプアニューギニアで取得したフィールドのデータを組み合わせ、3つの国際学会で発表した。オランダでの国際歴史言語学会では、パプアニューギニアの言語に関して場所格の振る舞いを発表した。特に、いくつかの場所機能の文法特徴が各言語で類似している点に注目し、言語連合または接触を伴う文法化で説明しようとして試みた。パプアニューギニアの現地語では、場所表現が文法化されていない場合も多く、その点から Rara な特徴を抽出することができた。次に、ヘルシンキの格に関する学会で、言語類型論の観点からの場所格・前置詞・後置詞の選択について発表した。ここでも、格、前置詞・後置詞以外の要素で表現される場所表現が Rara に相当することを主張した。さらに、格の多いフィン＝ウゴル語とオーストラリア現地語に注目し、両言語の副詞格を対照した研究を、ハンガリーで開催されたフィン＝ウゴル語研究の学会で発表した。特に、フィン＝ウゴル語では当然とみなされていた格が Rara に相当するのではないかと主張を行った。これらの発表すべてにおいて、格の珍しい特徴や機能(Rara)に注目しつつ、格を持つか持たないかは文法の複雑性に関与すると論じた。

2008年度に続いて、パプアニューギニアでフィールドワークを行い、トクピシン、アメリ語をはじめとした言語データの収集を実施し、パプアニューギニアの場所関係と副詞関係について調査を実施し、その成果の一部を文法の複雑性・文法の限界を組み合わせ、社会言語科学会で発表した。

### (3) 論文、学会発表等

本研究では、論文・学会発表をしているが、大きく以下の3種類の成果に分類できる。

まず、地域を限定した研究では、フィン＝ウゴル語を中心とした研究成果がある。これは格の多い言語として有名なハンガリー語やフィンランド語の格体系に着目したものが多く、さらに、2006年からフィールド調査を実施しているメラネシア地域(特にパプアニューギニアだが、オーストラリアの現地語やヴァヌアツの言語も含まれる)について、社会言語学、言語接触の点からアプローチを実施した。

2番目に、3ないし4言語の対照を実施した対照言語学的研究の成果がある。これは主にパラレルテキストを使用した詳細な研究である。これについては、日本語、英語、ドイツ語、ハンガリー語、フィンランド語、トクピシンを使用した研究成果がある。

3番目は、20言語から40言語の記述文法を横断的に調査した言語類型論的な研究である。アフリカやコーカサス、南米アメリカ等、記述文法しか入手できない地域の言語を適切にサンプリングし、普遍的特徴と地域的な傾向、さらには文法の限界に挑戦する研究を実施した。

その他の項目として、歴史言語学及び進化的な言語・文法への接近についても考察し、いくつかの本について書評を執筆した。

### (4) 得られた成果の国内外の位置づけ

日本語、英語とトクピシンの対照研究については、英国の出版社から本の1章として出版することができた。加えて、2009年度には複数の国際学会で発表することができ、対照言語学的・言語類型論的アプローチの有効性を示すことができた。その後の論文執筆で国際学会の成果は現在査読中である。国内では、特にパプアニューギニア方面での成果を多く発表し、太平洋地域の言語研究への関心を広げることができた。日本語でもいくつか論文を執筆し発表することができた。

### (5) 今後の展望

場所格と副詞格の研究に従事したが、研究を進めるにつれて、格を持たない言語や格の数が少ない言語の特徴にも興味を持った。その場合、格の他に前置詞や後置詞にも注目する必要がある。

また、類似構文のタイプ分けに関して有効な提案ができなかったため、これについては新たな知見を加えた論文を、現在論文を執筆中である。

副詞格については、本研究で取り上げたので、今後は場所格の用法に再び注目する。特に場所格の非空間的用法について、前置詞・後置詞の用法を含めた総合的研究に従事する予定である。特に非空間的用法の中でも時間表現に焦点を当てる予定である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

Nose Masahiko, A Contrastive Study of Comparative Constructions among English, Japanese and Tok Pisin: Using Corpora in Cross-linguistic Contrast, Xiao Richard(ed.). *Using Corpora in Contrastive and*

*Translation Studies*: Cambridge Scholars Publishing, 査読有, 2010, 457-470,  
野瀬昌彦, 文法の複雑性の点から見たパプアニューギニアの多言語状況: 特にマダン周辺地域, 社会言語科学会第25回大会発表論文集, 査読無, 2010, 218-221,  
野瀬昌彦, 格の多様性と多機能性: 特に複合格の機能的動機づけ, 東北大学言語学論集, 査読無, 2009, 89-101,  
Nose Masahiko, The expressions of comparative and similitive in Oceanic and non-Oceanic languages: a typological study, *Language and Linguistics in Oceania* 1, 査読有, 2009, 45-62,  
野瀬昌彦, 朽方修一 様態表現「Nのように」の対照言語学的分析: 日本語, 英語, ドイツ語, ハンガリー語とフィンランド語の平行テキスト研究, 日本語用論学会第11回大会発表論文集, 査読無, 2009, 103-110.  
野瀬昌彦, クレオールの世界言語学的考察: 特にトクピシンとビスラマの状況, 麗澤大学紀要 87, 査読有, 2008, 91-113,  
Nose Masahiko, Functional study on adverbial cases and adpositions in Finno-Ugric and Indo-European, 麗澤学際ジャーナル 16-2, 査読無, 2008, 47-56,  
Nose Masahiko, Functional ambiguities on causal case & postpositions in Finnish and Hungarian: morphosemantics & grammaticalization, Tokusu Kurebito (ed.), *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses*, 査読無, 2008, 137-145,

[学会発表](計5件)

野瀬昌彦, 朽方修一, 日本語の文連結における「は・が」と, 他言語で翻訳された際に現れる語用論的機能: 英語, ドイツ語, ハンガリー語の平行テキスト対照, 第12回日本語用論学会, 2009年12月6日, 龍谷大学,  
Nose Masahiko, Contrastive study between the adverbial case functions of Finno-Ugric and Australian languages, *New Trends in Uralistics: typology, syntax, sociolinguistics*, 2009年9月4日, セゲド大学・ハンガリー,  
Nose Masahiko, Choice of cases or pre/post-positions for several locative meanings: in terms of complexity of the grammar, *Case in and across languages*, 2009年8月27日, ヘルシンキ大学・フィンランド,  
Nose Masahiko, Word formations of locative functions in the languages of Madang area, Papua New Guinea: a diachronic-typological perspective, The 19th International

Conference on Historical Linguistics, 2009年8月10日, ラドバウド大学ナイメーヘン・オランダ,  
野瀬昌彦, ハンス = ヨルグ, ビビコ, 「言語構造の世界アトラス(WALS)」を使用した言語の多様性の視覚化 格を持たない言語の文法特徴, 第136回日本語学会, 2008年6月14日, 学習院大学,

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野瀬 昌彦 (NOSE MASAHIKO)  
麗澤大学・外国語学部・助教  
研究者番号: 20508973

(2) 研究分担者

無